

令和 元年 6 月 21 日現在

機関番号：32823

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K12180

研究課題名(和文) 中堅助産師が熟練者として成長する助産外来教育プログラムの開発

研究課題名(英文) Development of a midwifery clinic education program where mid-career midwives grow up as experts

研究代表者

渡邊 淳子 (Watanabe, Junko)

東京医療学院大学・保健医療学部・教授

研究者番号：30539549

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：助産外来を担当する中堅助産師を対象に教育に関する実態とニーズについて調査をした。その結果、妊婦健康診査の実施は70.4%であり、希望する教育内容は、診断技術、保健指導に関すること、望む研修は、超音波、乳房ケア、コミュニケーション、カウンセリングであった。これらを基にした、助産外来用ルーブリックとGibbsのリフレクティブ・サイクルを活用した教育プログラムを開発し、10名に実施した。その結果、ルーブリックでは初回調査と介入後調査を比較した結果、有意差が示された( $t=-3.01$ ,  $df=18$ ,  $p<.004$ )。リフレクションでは助産師は自己の実践を振り返り、次へと目標を確認する機会になっていた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

わが国の母子を取り巻く環境は、少子化、産後うつ、児童虐待などの課題を抱えている。安全で安心な出産、育児を支援するためには、助産師の実践能力の向上が求められる。また、助産師は中堅になると職業的発達が停滞するという報告がある。新人助産師向けの教育プログラムは多く開発されているが、中堅者向けの教育プログラムは少ない。そこで助産外来を担当する中堅助産師が熟練者として成長できる教育プログラムを開発し、その有効性を検証した。

研究成果の概要(英文)：We surveyed the current situation and needs of education for mid-career midwives who are in charge of midwifery clinic. As a result, the medical checkup for pregnant women was 70.4%, and the desired educational contents were on diagnostic technology and health guidance, and the desired training was on ultrasound, breast care, communication and counseling. Based on these, we developed an education program using the midwifery clinic rubric and the reflection cycle of Gibbs and implemented it to 10 midwives. As a result, in the rubric, as a result of comparing the initial survey and the post-intervention survey by the corresponding t-test, a significant difference was shown ( $t = -3.01$ ,  $df = 18$ ,  $p < .004$ ). In reflection, the midwife had the opportunity to reflect on their own practice and to confirm their goals next time.

研究分野：母性看護学・助産学

キーワード：助産師外来 ルーブリック リフレクション 助産実践能力 中堅助産師

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

## 1. 研究開始当初の背景

### 1) 周産期医療の現状

わが国では周産期医療の危機が叫ばれ、医師と助産師の協働と助産師の専門性の発揮が見直されてきた。2008年には厚生労働省は「安心と希望の医療確保ビジョン」において、助産師への社会的要請を明確にし、その中で院内助産所・助産師外来の普及等を明記した。日本看護協会では、2008年重点課題の「安全で満足度の高い出産環境に向けた院内助産システム推進」で、「院内助産システム」に「助産外来」「院内助産」の用語を定義した。これらの経緯から、助産師の自立を促し、実践能力の発揮が期待されている。

2012年の全出生数における極低出生体重児の割合は0.8%、低出生体重児の割合は9.6%で上昇傾向にあり、その要因として晩産化、不妊治療症例数の増加、やせ志向などがあげられる。低出生体重児の割合は、OECD加盟国では、ギリシャに次いで多いという結果であり、また、厚生労働省の報告では、2014年の児童虐待数は88,931件と年々増加している。周産期の専門職の役割の発揮が期待されている。

### 2) 助産師の教育へのニーズ

わが国の病院勤務助産師を対象とした調査では、特定領域の専門技術のキャリア開発を望んでいるが、キャリアコースや教育プログラムの不足が指摘されており、中堅助産師は成長に停滞感を感じていた。一方で、新人助産師の育成方法は多数報告されているが、中堅助産師への教育方法に関する報告はほとんどない。

助産実践能力習熟段階(クリニカルラダー)にそれに基づく教育プログラムは、OJT、自己学習、望ましい研修で構成されているが、個々の到達目標に対応した具体的な教育プログラムではなく、また中堅者向けの研修プログラムは少ない。

## 2. 研究の目的

中堅助産師が熟練助産師として成長していくことを目指した助産外来担当者向けの教育プログラムの開発である。これまでに開発した助産外来用ルーブリックを用いた中堅者向けの教育プログラムの開発を行い、その実用可能性を検討するものである。

## 3. 研究の方法

本研究における教育プログラムの開発過程は、「実態調査」「教育プログラムの開発」「開発した教育プログラムの運用可能性の検証」である。なお、本研究計画は、所属大学倫理審査委員会ならびに研究協力施設の倫理審査委員会の承認を受けて実施した。

### 1) 助産外来の運営の実態に関する調査

助産外来を担当する中堅助産師を対象に教育に関する実態とニーズを明らかにする目的で、調査を実施した。調査方法は、公益社団法人日本産科婦人科学会のウェブサイトに掲載されている「周産期医療の広場」から、分娩取扱い施設2427施設を抽出した。そして、それぞれの施設のホームページから、助産外来の実施を標榜していた646施設を抽出し、調査を依頼した。各施設で助産外来を担当している助産師3名に、無記名式調査票の記入を依頼し、個別の返信用封筒を用い郵送にて回収した。

### 2) 教育プログラムの開発

調査結果をもとに、助産外来用ルーブリックとGibbsのリフレクティブ・サイクルを用いた教育プログラムを開発した。教育プログラムの評価は、形成評価、アウトカム評価、プログラム評価を実施した。形成評価として、Gibbsのリフレクティブ・サイクルを、アウトカム評価

として、助産外来用ルーブリックを、プログラム評価は助産師及びリフレクションを共に実施した研究協力者にインタビューを行った。

助産外来用ルーブリックは、パフォーマンス評価であり、助産行為として、「妊娠経過を的確に診断できる」「妊婦の健康生活を診断できる」「妊婦の健康生活を支援することができる」「妊婦とその家族および多職種との人間関係を調整できる」の4項目に「思考・判断」、「知識・技術」、「関心・意欲・態度」の3つの観点で作成した。それらを3段階で評価するものである。Gibbsのリフレクティブ・サイクルは、「記述/描写」「感覚」「推論」「分析」「評価」「アクション・プラン」の6段階で構成されており、リフレクションワークシートに記述するものである。

### 3) 開発した教育プログラムの運用可能性の検証

助産外来を積極的に取り入れている医療機関にて、助産外来担当者に教育プログラムを実施し、運用可能性を探った。

## 4. 研究成果

### 1) 助産外来の運営の実態

1932部配布し、回収は665部(回収率34.4%)であった。回答者の45.6%は、助産師としての経験年数が11~20年目であった。助産外来にて妊婦健康診査を実施していたのは、468人(70.4%)であった。地域別にみると、多い地域は関東地方が143名(30.8%)であり、少ないのは中国・四国地方が32名(6.9%)であった。医師との連携方法を規定していたのは、375人(80.1%)、助産外来を担当する助産師の基準があるのは、262人(56.0%)、助産外来用教育プログラムがあるのは、51人(10.9%)、助産外来用評価指標を作成しているのは、58人(12.4%)であった。

自由記述は、テキストマイニングを用いて質的に分析した。頻出キーワードでは、助産外来の課題は、「超音波」「技術」「指導」であり、助産外来で心掛けていることは、「妊婦」「話」「傾聴」であり、成長するために臨む研修は、「超音波」「母乳」「緊急時」「コミュニケーション」「カウンセリング」であった。

### 2) 教育プログラムの運用可能性の検証

教育プログラムを2か月ごと3回で、6か月間実施し評価した。その結果、アウトカム評価として用いたルーブリック評価表では、初回調査と介入後調査を対応のあるt検定で比較した結果、有意差が示された( $t=-3.01$ ,  $df=18$ ,  $p<.004$ )。形成評価では、診断技術において、医学的な妊娠経過の診断、妊娠生活の診断に向上がみられた。プログラム評価では、助産師にインタビューを実施し、全員の助産師が成長を実感できたという意見であった。助産外来は、助産師個人が他者から評価を受ける機会が少なく、毎日の業務が終われば終了となり、振り返る機会を意図的に持つために、リフレクションワークシートを活用する意義を感じていた。

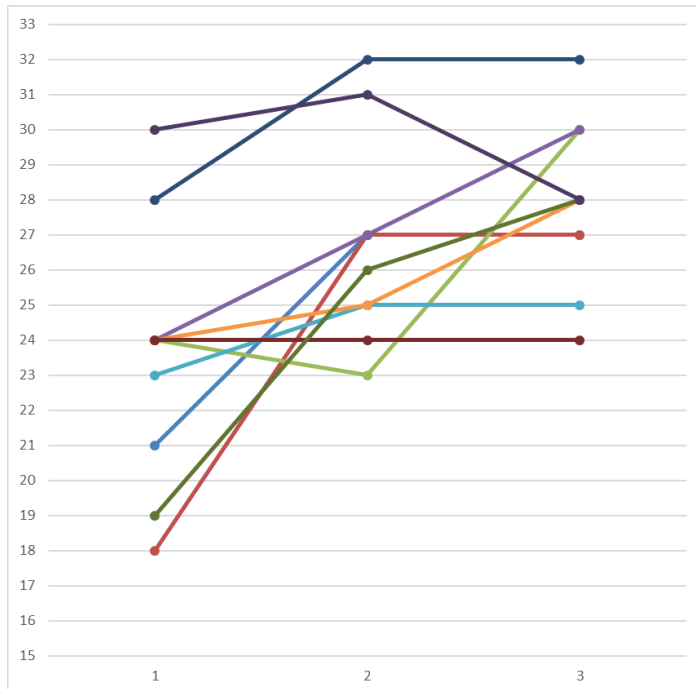


図 ルーブリック合計得点の推移

## 5. 主な発表論文等

### 〔雑誌論文〕(計 10 件)

渡邊淳子, 齋藤益子, 石川紀子: 助産外来における実践力の評価指標としてのルーブリックの開発過程. 日本母子看護学会誌, 査読有, 第 11 巻, 105-114, 2018.

菱谷純子, 渡邊淳子, 石川紀子, 齋藤益子: 妊婦の出産準備感と助産師の Professional Learning Climate との関係. 日本母子看護学会誌, 査読有, 第 12 巻, 11-19, 2019.

渡邊淳子: 妊婦健康診査の課題 助産師の立場から. 周産期医学, 査読無, 第 49 巻, 273-277, 2019.

### 〔学会発表〕(計 10 件)

渡邊淳子, 石川紀子, 齋藤益子, 小松佐紀: 助産外来での助産師の関わりと出産準備状況. 第 34 回東京母性衛生学会学術集会, 東京, 2016 年.

渡邊淳子, 石川紀子, 齋藤益子, 小松佐紀: 助産外来担当者を支援する上での課題 フォーカスグループインタビューから. 第 16 回日本母子看護学会学術集会, 千葉, 2016 年.

渡邊淳子, 石川紀子: 助産外来を担当する助産師の実践評価 ルーブリックを用いたリフレクション. 第 7 回日本看護評価学会学術集会, 東京, 2017 年.

石川紀子, 渡邊淳子, 齋藤益子, 遠藤俊子, 小松佐紀: 助産外来用ルーブリック自己評価指標の検討 リフレクションの効果. 第 31 回日本助産学会学術集会, 徳島, 2017 年.

Junko Watanabe, Noriko Ishikawa: Clinical Practice Caring revealed by reflection after midwifery clinic work. The 3rd International Society of Caring and Peace Conference, Kurume, 2017.

渡邊淳子, 石川紀子, 齋藤益子, 小松佐紀: 助産外来用ルーブリックの開発. 第 17 回日本母子看護学会学術集会, 埼玉, 2017 年.

渡邊淳子, 渡邊幸恵, 齋藤益子, 松永佳子, 石川紀子, 遠藤俊子, 得松奈月, 小松佐紀: 助産外来実施施設での助産師の現任教育の実態とニーズ. 第 58 回日本母性衛生学会学術集会, 神戸, 2017 年.

渡邊淳子, 渡邊幸恵, 齋藤益子, 松永佳子, 石川紀子, 遠藤俊子, 得松奈月, 小松佐紀: 助産外来における現任教育のニーズの実態 . 第 32 回日本助産学会学術集会, 横浜, 2018 年 .

渡邊幸恵, 渡邊淳子, 松永佳子, 齋藤益子, 石川紀子, 遠藤俊子, 得松奈月, 小松佐紀: 助産外来実施施設における担当基準・教育プログラム・評価指標の有無の実態 . 第 59 回日本母性衛生学会学術集会, 新潟, 2018 年 .

渡邊淳子, 渡邊幸恵, 松永佳子, 齋藤益子, 石川紀子, 遠藤俊子, 得松奈月, 小松佐紀, 池田真弓, 菱谷純子: 助産師外来担当者に向けた教育プログラムの開発 ループリックとリフレクションから . 第 33 回日本助産学会学術集会, 福岡, 2019 年 .

## 6 . 研究組織

### (1)研究代表者

渡邊 淳子 (WATANABE, Junko)

東京医療学院大学

保健医療学部

教授

研究者番号 : 30539649

### (2)研究分担者

齋藤 益子 (Saito, Masuko)

東京医療保健大学

東が丘・立川看護学部

教授

研究者番号 : 30289962

### (3)連携研究者

遠藤 俊子 (Endo, Toshiko)

京都橘大学

看護学部

教授

研究者番号 : 00232992

松永佳子 (Matsunaga, Yoshiko)

東邦大学

看護学部

准教授

研究者番号 : 70341245

### (4)研究協力者

石川紀子 (Ishikawa, Noriko)

静岡県立看護大学

看護学部

准教授

渡邊 幸恵 (Watanabe, Sachie)

東京医療学院大学

保健医療学部

助教

池田 真弓 (Ikeda, Mayumi)

聖路加国際大学大学院博士後期課程

菱谷 純子 (Hishiya, Sumiko)

元筑波大学大学院博士後期課程

小松 佐紀 (Komastu, Saki)

母子愛育会総合母子保健センター愛育病院

看護部長

得松 奈月 (Tokumastu, Natuki)

母子愛育会総合母子保健センター愛育病院

副師長

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。